TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　624語

The Story of the First Snowdrops

さいしょのスノードロップのおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：mleigh

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　くらい家で、自分の手がらをかぞえているおじいさん。そこへ、金色のまき毛の若者がやってきて、手がらくらべがはじまります。



An old man sat alone in his house. It Was full of shadows; it was dark and gloomy. The old man cared nothing for the shadows or the darkness, for he was thinking of all the mighty deeds that he had done. "There is no one else in the world," he muttered, "who has done such deeds as I," and he counted them over aloud. A sound outside of the house interrupted him. "What can it be?" he said to himself. "How dares anything interrupt me? I have told all things to be still. It sounds like the rippling of waters, and I have told the waters to be quiet in their beds. There it is again. It is like the singing of birds, and I have sent the birds far away to the south."

Some one opened the door and came in. It was a youth with sunny curls and rosy face.

"Who said you might come in?" muttered the old man.

"Did not you?" asked the youth, with a merry little laugh. "I am really afraid that I came without asking. You see, every one is glad to see me and"—

"I am not," interrupted the old man.

"I have heard rumors of your great deeds," said the youth, "and I came to see whether the tales are true."

"The deeds are more true than the tales," muttered the old man, "for the tales are never great enough. No one can count the wonderful things I have done."

"And what are they?" asked the young man gravely, but with a merry little twinkle in his eyes that would have made one think of the waves sparkling in the sunlight. "Let us see whether you or I can tell the greatest tale."

"I can breathe upon a river and turn it to ice," said the old man.

"I can breathe upon the ice and turn it to a river," said the youth.

"I can say to water, 'Stand still,' and it will not dare to stir."

"I can say, 'Stand no longer,' and it will go running and chattering down the mountain side."

"I shake my white head," said the old man, "and snow covers the earth."

"I shake my curls," said the young man, "and the air sparkles with sunshine. In a moment the snow is gone."

"I say to the birds, 'Sing no more. Leave me,' and they spread their wings and fly far away."

"I say, 'Little birds, come back,' and in a moment they are back again and singing their sweetest songs to me."

"No one can count the leaves," said the old man, "but whether I shake the trees with my icy touch, or whether I turn my cold breath upon them, they fall to the

ground with fear and trembling. Are there any rumors of my deeds as great as that?"

The young man answered gravely, but with a laugh in his voice, "I never saw any leaves falling to the ground, for when I appear, they are all fair and green and trembling with the gladness of my coming."

So the two talked all night long. As morning came near, the old man appeared weary, but the youth grew merrier. The sunlight brightened, and the youth turned to the open door. The trees were full of birds, and when they saw him, they sang, "O beautiful spring! glad are we to look again upon your face."

"My own dear birds!" cried spring. He turned to say good-by, but the old man was gone, and where he had stood were only snowflakes. But were they snowflakes? He looked again. They were little white snowdrops, the first flowers of spring, the only flowers that can remember the winter.

ひとりのおじいさんが、家にひとりですわっていました。家の中はかげだらけで、うすぐらく、どんよりしていました。おじいさんは、かげもくらさも気にしていませんでした。自分がやってきた、たくさんのえらい手がらのことを考えていたからです。「世界じゅうで、わしほどの手がらを立てた者はほかにいない」とおじいさんはぶつぶつ言って、その手がらを声に出してかぞえていきました。家の外で音がして、おじいさんのじゃまをしました。「何の音だろう？」とおじいさんはひとりごとを言いました。「わしのじゃまをするとは、なんというやつだ。すべてのものに、しずかにしていろと言いつけてあるのに。水がさらさら流れる音のようだが、水には川床でじっとしていろと言いつけてある。ほら、また聞こえた。鳥が歌っているようだが、鳥はずっと南へ追いやったはずだ。」

だれかが戸をあけて入ってきました。それは、お日さまのような金色のまき毛に、ばら色のほっぺをした若者でした。

「だれが入っていいと言った？」とおじいさんはぶつぶつ言いました。

「あなたではありませんでしたか？」と若者は楽しそうに小さくわらってたずねました。「ことわらずに入ってきてしまったようですね。なにしろ、みんなわたしに会うとよろこんでくれるので――」

「わしはよろこばん」とおじいさんは話をさえぎりました。

「あなたのえらい手がらのうわさを聞きました」と若者は言いました。「それで、そのお話が本当かどうか、たしかめに来たのです。」

「手がらは、お話よりももっとすごいぞ」とおじいさんはぶつぶつ言いました。「お話では、とても言いつくせないからな。わしがやってきたすばらしいことは、だれにもかぞえきれん。」

「では、それはどんなことですか？」と若者はまじめな顔でたずねましたが、その目は楽しそうにきらきらしていて、日の光にかがやく波を思わせました。「あなたとわたしと、どちらがいちばんすごいお話ができるか、くらべてみましょう。」

「わしは川に息をふきかけて、氷にかえることができる」とおじいさんは言いました。

「わたしは氷に息をふきかけて、川にかえることができます」と若者は言いました。

「わしが水に『じっとしていろ』と言えば、水はうごこうともしない。」

「わたしが『もうじっとしていなくていい』と言えば、水はおしゃべりしながら山の斜面をかけおりていきます。」

「わしが白い頭をふると」とおじいさんは言いました。「雪が地上をおおう。」

「わたしがまき毛をふると」と若者は言いました。「空気は日の光できらめきます。あっというまに、雪は消えてしまいます。」

「わしが鳥に言う。『もう歌うな。ここから出ていけ』と。すると鳥たちはつばさをひろげて、遠くへとんでいく。」

「わたしが『小鳥たち、もどっておいで』と言えば、鳥たちはすぐにもどってきて、いちばんきれいな歌を歌ってくれます。」

「木の葉はだれにもかぞえきれん」とおじいさんは言いました。「だが、わしがつめたい手で木をゆすっても、つめたい息をふきかけても、葉はこわがってふるえながら地面に落ちる。これほどの手がらのうわさが、ほかにあるか？」

若者は、まじめに、でも声にわらいをふくませて答えました。「わたしは、木の葉が地面に落ちるのを見たことがありません。わたしがあらわれると、葉はみんな美しい緑で、わたしが来たうれしさにふるえているのですから。」

こうしてふたりは、ひと晩じゅう話しあいました。朝が近づくと、おじいさんはつかれたようすになりましたが、若者はますます楽しそうになりました。日の光が明るくなり、若者はあいている戸口のほうをふりむきました。木々には鳥がいっぱいいて、若者を見ると歌いました。「ああ、美しい春！ またあなたの顔が見られて、うれしいな。」

「わたしのかわいい鳥たち！」と春はさけびました。春はさよならを言おうとふりむきましたが、おじいさんはもういませんでした。おじいさんが立っていたところには、雪のひとひらがいくつかあるだけでした。でも、それは本当に雪だったのでしょうか？春はもう一度見ました。それは小さな白いスノードロップでした。春いちばんにさく花で、冬のことをおぼえているただひとつの花なのです。

たんご と クイズ　さいしょのスノードロップのおはなし

snowdrops スノードロップ（花）	**ice** 氷	**snow** 雪
curls まき毛	**birds** 鳥	**leaves** 葉っぱ
spring 春		

Q1 おじいさんが白い頭をふると、どうなる？

① 花がさく　② 雪が地上をおおう　③ 雨がふる

Q2 若者の本当のすがたは？

① 春　② 夏　③ お日さま

Q3 おじいさんが立っていたところにあったのは？

① ゆきだるま　② こおった川　③ 白いスノードロップ

こたえ

Q1 ②　おじいさんが白い頭をふると、雪が地上をおおいます。じつは、このおじいさんは冬だったのです。

Q2 ①　鳥たちは若者を見て「ああ、美しい春！」と歌いました。金色のまき毛の若者は、春だったのです。

Q3 ③　雪のひとひらに見えたのは、春いちばんにさく小さな白いスノードロップの花で、冬をおぼえている花でした。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：mleigh（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。